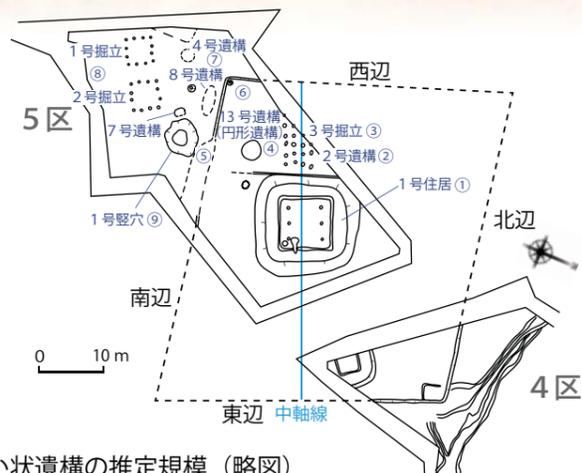


囲い状遺構の構造を推定する

囲い状遺構は、網代垣によって区画された大規模な方形区画施設です。高さ3mにおよぶ網代垣で囲い、大型住居や掘立柱建物、円形遺構などが規則的に配置されています。

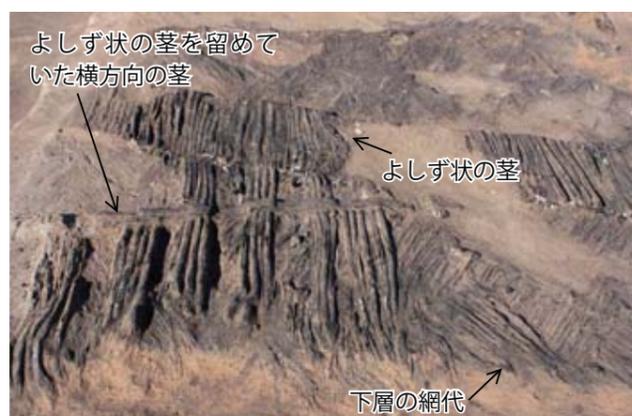
これまでの調査で北東隅と南西隅を確認したことで、この遺構の規模の推定が可能となりました。これまでの調査でわかったことは次のとおりです。

- 1) 北東隅と南西隅は直角ではなく、100度程度の角度をもつため平面形状は平行四辺形となる。
- 2) 網代垣を設置する柱は1.8m間隔であるため、囲いの規模もこの基準(1.8m=1間)で推定できる。
- 3) この基準で推定すると規模は次のとおり。
東辺=48.6m 27間、西辺=48.6m 27間
南辺=55.8m 31間、北辺=54.0m 30間
- 4) 大型竪穴住居などの内部施設の規則的配置は、東辺を基準とする中軸線に沿った位置に関係している。なお、推定中軸線は東西54m。
- 5) 内部を仕切る垣(2号遺構)は、囲い状遺構を東西7:3に区画する位置に設置される。

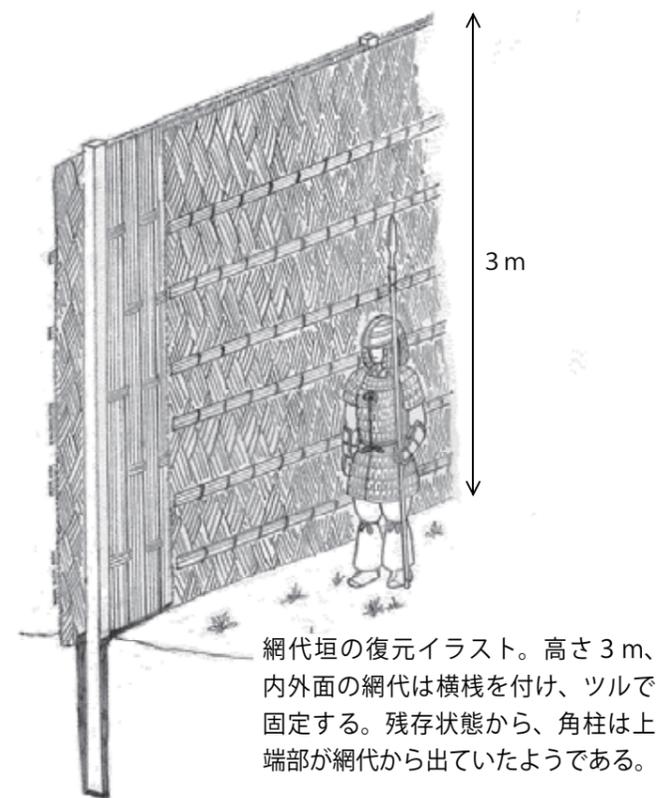


囲い状遺構の推定規模(略図)

東辺を基準にした中軸線上に大型竪穴住居、掘立柱建物が設置される。中軸線は東西54m。



倒壊、炭化した網代垣。上層の網代はすでにないが、中層のよしず状構造材とその下位に網代が確認できる。よしず状構造材は横方向の植物莖で編み込むように固定される。



新発見 網代垣の構造

網代垣は、最初の噴火による火山灰降下時には建っていましたが、その後に発生した火砕流で倒壊しました。火砕流の熱により燃えながら埋没することで、当時の姿を保ったまま炭化した状態で残存していました。

また、腐食した網代は火砕流中に痕跡が残され、これまでわからなかった網代垣の構造が推定できることになりました。網代にはアシやシノダケのような中空の植物莖が用いられています。確認された網代垣の構造は次のとおりです。

- 1) 網代垣を支える柱は角柱が用いられ1.8m間隔で設置される。
- 2) 網代垣は、中層によしず状の構造材、内外面に網代を設置する三層構造となる。網代は、横棧とした植物莖をツルで巻き留め固定している。
- 3) 倒壊した網代垣はその痕跡から高さ3m、厚さは30cmから40cm程度である。



かない
金井遺跡群

よろい
甲を着た古墳人だより 特集号
平成28年5月14日(土)

古墳時代 地域首長の拠点遺構 新発見!

かないしもしんでん
金井下新田遺跡

はじめに

渋川市金井下新田遺跡は、渋川土木事務所の委託を受け、平成26年度から上信自動車道建設に伴って発掘調査がおこなわれてきました。発掘調査は今年度で3年目を迎えます。

26年度の調査で、6世紀初頭の榛名山噴火による火砕流と火山灰に埋もれた状態で、網代垣に囲まれた囲い状遺構の一部が発見されました。27年度の調査ではその囲い状遺構が高さ3mの網代垣で、約55m四方に区画されていたことがわかりました。網代垣の内側には大型竪穴住居と掘立柱建物が整然と並んでおり、その規模と規格性から、古墳時代の地域首長の拠点遺構と考えられます。また、囲い状遺構の外側には、祭祀用の土器や石製模造品などが、火山灰の下で古墳時代にあったままの状態で見つかりました。

幾層にも重なる火山灰を少しずつ掘り下げて調査を進めたところ、建物の解体途中もしくは解体直後に火山噴火が起きたこともわかりました。網代垣で囲まれた空間の内外で何が行われていたのか、なぜ建物を解体しようとしていたのか、金井下新田遺跡は具体的な古墳時代像を探ることができる重要な調査となりました。



金井下新田遺跡と金井東裏遺跡

金井下新田遺跡と金井東裏遺跡は榛名山麓末端に広がる扇状地上に位置し、600mほどの距離があります。



① 大型住居（1号住居）

一辺9m、深さ1.6mの巨大な竪穴住居。東壁にカマド、南側に入出口を設ける。6本柱構造で、太さ20cmの柱が炭化して残存していた。床面積はおよそ40畳の広さに相当する。

② 内部を区画する垣根（2号遺構）

大型住居と掘立柱建物の間に設置される垣根。垣は火砕流により流失しているが、敷設された溝部分に交差する垣根の痕跡が確認された。囲い状遺構を東西に区画するために設置されている。

⑨ 1号竪穴遺構

囲い状遺構南辺から3m南の遺構。一辺4m前後の竪穴でカマドは認められない。遺構の性格を示す特徴や遺物に乏しい。火山灰降下時には埋没していた。囲い状遺構との関係がこれからの課題である。

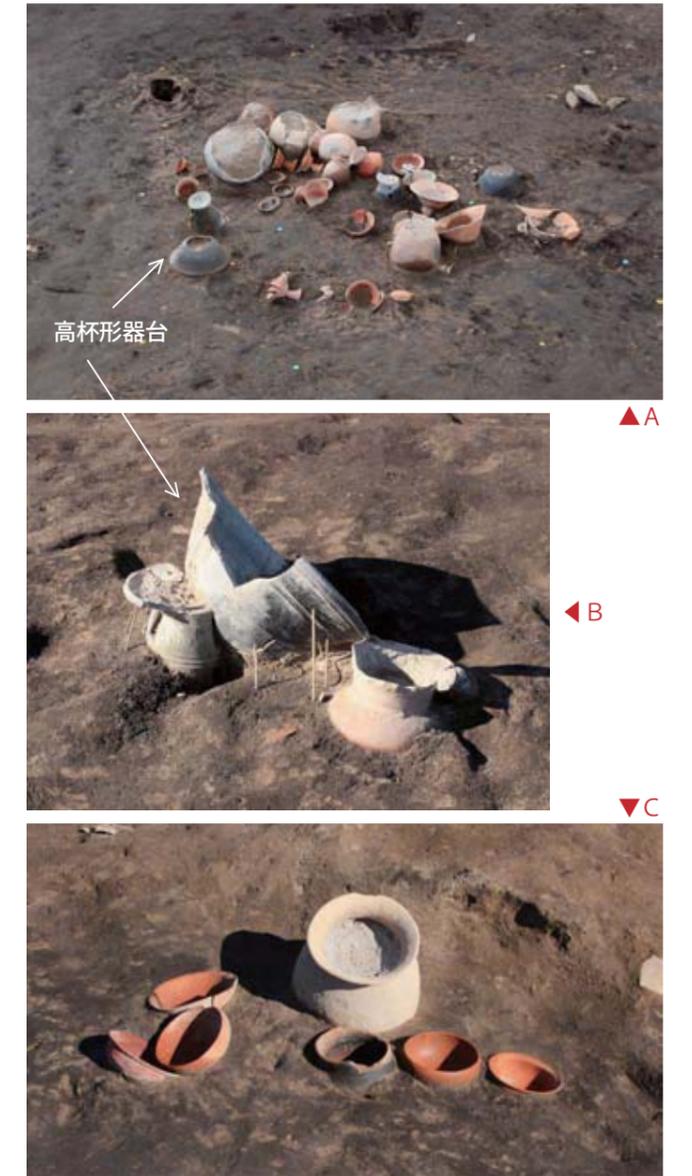
⑧ 1号・2号掘立柱建物

東西に2棟並ぶ。西側が1号、東側が2号掘立柱建物。3間×3間総柱、火山灰降下時には上屋、束柱はなく外側の柱のみだった。3号掘立柱建物同様に解体した建物。ここにも土器類を用いた祭祀遺構を複数確認。



⑦ 祭祀遺構群（A、B、C）

土器、白玉、石製模造品などを用いた祭祀遺構が複数存在する。土器は破碎され部分的に土中に埋まるものが目立つ。A（4号遺構）では、古墳の副葬品として出土例がある高杯形器台を含む土器類や白玉、石製模造品が出土し、器台は脚部が土中に埋まり、杯部が外されている。B（8号遺構）も高杯形器台の杯部が外される。人為的なもので、祭祀の一連の行為の結果かもしれない。C（7号遺構）は、土器内に白玉が入っていた。



発見された古墳時代遺構群

平成27年度の調査で次の点がわかりました。

1) 囲い状遺構の南西隅を確認したこと。すでに北東隅が発見されていたことから区画規模の推定が可能になったこと。

2) 火砕流により押し倒された網代垣の痕跡から高さは3mであること。さらに、内外面に網代、中層によし状の構造材を挟む三層構造であること。

3) 囲い内には、大型住居、掘立柱建物、円形遺構が区画用の垣とともに整然と配置される。さらに、掘立柱建物には鹿角製小札などの素材となり得る鹿角が60個前後出土したこと。

4) 囲い状遺構外の南西側には土器、白玉、石製模造品などを用いた祭祀遺構や掘立柱建物、竪穴遺構が集中していること。

このような現状ですが、解明は今後の課題となります。



③ 3号掘立柱建物と鹿角

大型住居の西側に配置される建物。3間×5間総柱の構造で火山灰降下時には上屋はなく、柱のみの状態だった。地表面には平均9cmに分割した鹿角が60個前後まとまって出土した。



④ 円形遺構（13号遺構）

3号掘立柱建物の南側にある径3mの円形建物。周囲を円形に数cm掘り下げ、壁に沿ってヨシなどの植物の茎により囲っていたようだ。火山灰降下時には屋根はなかった。遺物は出土していない。



⑤⑥ 囲い状遺構（南西部分の確認）

南西隅は北東隅同様に約100度の角度で屈曲。そのため、囲いの区画は平行四辺形となる。規模を推定すると、東西約54m、南北約49m。網代垣は区画溝内に1.8m間隔で柱を設置し取り付ける。南西隅に接して径80cmの土坑を確認した。用途不明であるが、縁辺から石製模造品が連なって出土した。

